

老後があるのは当たり前ですか？

秘書の孝明さんがわたしに「平均寿命の推移」と「出生率の推移」の表を見せながら少子化の原因は何だと思いますか、と尋ねました。



日本男性の平均寿命が60歳に達したのは昭和26年(1951)です、当時の定年年齢は55歳です、いま平均寿命は80歳(2010年79.64歳)です、20年も寿命が伸びています。

でも定年は60歳です、嘱託制度を作って65歳まで働けるようになりつつありますが、事実上は60歳です。

寿命が20年も伸びたのに定年は5年しか延びていません、だから「老後」が出来てしまったのです。

1971年、男性の平均寿命が70歳に達しました、老後が5年から10年に延びたのです、そしたら1974年を境に急激な少子化が始まりました、平均寿命が伸びれば伸びるほど出生率は低下してきました、紛れもない事実です。

高校、大学、各種専門学校への進学率もどんどん上昇しました、子育て期間が長くなっていったのです。

寿命が伸びた分だけ老後の金が必要になります、進学率が高くなる分だけ教育費がかかります、でも、定年は変わりませんでした、結果、少子化が進みました、寿命が伸びて老後が長くなった事が少子化の最大の原因だと私は思います。

定年を寿命の伸びに応じて延長すれば老後はなくなります、「働いている間は老後ではない」、老後はなくせます、老後がないほうがみんな幸せに暮らせると思います。

孝明さんは私に「老後」は戦後にできてしまったもの、働いている間は老後ではない、老後はなくせる、という目から鱗の事実を教えてくださいました。

孝明さんの話には私は深く納得しました。おおさか維新の会の松井代表や議員のみなさんにも孝明さんの話を伝えて、老後のない社会を作っていきたいと考えています。